

川底の下を流れる川　く貝の淵峠く

一行は、荒川の支流横川の流れを左に見ながら、貝の淵峠をゆっくりと登っていく。

前方から流れて来る横川はこの当たりで大きく曲り、淵を作っている。

「バードさん、この当たりの川は、どうやら川底の地下にまた川が流れているらしいです」

案内人と話をしていたイトーがうれしそうに話しかけてきた。

「それはまた、どういうこと？」

バードが、目を横川のほうに向けると、白髪の老人が岩に腰かけて川面をジッと眺めている。

「バードさん。あの白い髪の人、実は人間ではないのです。川牛と言われ、この川を支配している神様なのだそうです。川底の下を流れる川も」

イトーが言うには、この貝の淵の上流、いもり池の近くの川沿いでは、岩にボコボコと穴が空いている。その穴に、鉄の杭を投げ入れたところ、この貝の淵に流れ来たという。また、

もつと下流には南蛮淵と呼ばれる淵がある。荒川の支流にある大きな瀧の滝つぼに南蛮を投げ入れたところ、はるか下流のその淵に南蛮が浮き出て来たので、南蛮淵という名がついた。この大地の下は地下川でつながっている。



岩に腰かけた白髪の老人が、こちらを向いて大声で何か叫んでいる。

「イトーなんて言ってるの？」

「牛に乗った女は、初めてだよ。転げ落ちないように気を付けて行けっ」

「そうか、牛の神様だものね。」

バードは思わず大声で叫び返した。

「サンキュー！」

牝牛がびっくりして、急にたちどまった。バードは危うく落っこちそうになった。